

多能工化と働きやすい環境整備

60期の経営計画発表会には35人が参加



第60期経営計画発表会

人材への投資を継続

製品分野について。現在の主力は鉄骨関連の加工品だが、それに加え自動倉庫ラックの鉄骨部材なども手掛けている。母

「現在の人員は20人弱で、今後の大きなテーマは多能工化。鉄工所の仕事は工程が多く、特定の作業だけでできる人材ではなく、複数の作業をこなせる人材が必要になる。社員一人ひとりが営業マンであり、生産マンでもあるという意識を持ってもらい、会社全体の力を高めていきたい。人材への投資はこれからも重要なテーマになる。働きやすい環境を整えるという意味でも、昨年から休日年間1

新規事業のトレーラーハウス 構造物製作技術生かす



25日に増やした

設備投資や自動化については。

「人手不足の時代でもあり、作業の自動化や効率化は避けて通れない。人材育の技術を生かすことができ成と並行して設備投資を進める。今後はこの分野を上げめ、生産性の向上を図る必要がある。今年夏から秋に新しい分野に挑戦すること、会社の可能性も広がる」

を更新する。ただ、設備を導入するだけでなく、それを生かす人材を育てることが重要だと考えている。

新規事業として取り



組んでいる分野は。

「現在力を入れているのがトレーラーハウス事業だ。建築とは異なる分野だが、構造物を製作する当社が、技術を生かすことができ成と並行して設備投資を進める。今後はこの分野を上げめ、生産性の向上を図る必要がある。今年夏から秋に新しい分野に挑戦すること、会社の可能性も広がる」

「経営理念について。『当社の理念は、仕事を通じて社会を、機械にする』というものが、社員が喜び、協力会社が喜び、お客さまが喜び、そついで会社で

「60周年は一つの節目だが、あくまで通過点。これまでの歴史を大切にしながら、次の世代につながる会社にしていきたい。昨年私自身が60歳という還暦の年を迎えたが、会社も今年で『還暦』。内容の濃い、『へビー』な一年にして

この人にこのテーマ

小田鉄工設立60周年 歩みと展望

「多くの人に支えられてここまで来ることができた」という思いが強い。小田鉄工所として1940年(昭15)に創業し、祖父が方力一丁から始めた仕事だった。農作業で使う鍬や鎌などの鍛冶仕事からスタートし、地域の織物機械の修理や据え付け、井戸掘り、水道屋さんとして事業を手掛けてきた。時代の変化に合わせて仕事の内容は大きく変わ

設立60周年を迎えた率直な思いは。Mグレードファブの小田鉄工(本社・兵庫東加西市)は1966年(昭41)の設立から今年で60周年を迎えた。井戸用の工具修理、織物機械の補修から鉄筋加工、建設・土木関連の金属加工へと事業を拡大。現在は建築鉄骨や建築金物などの製作を手掛け、地域のものづくりを支えている。60周年の節目を迎えた同社のこれまでの歩みと現状、そして今後の展望を、小田岳人社長に聞いた。(斎藤 雄輝)



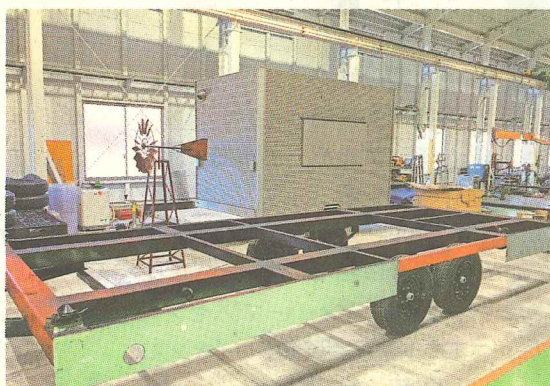
小田 岳人社長に聞く

時代とともに事業領域拡大 鍛冶仕事から鋼構造物製作へ

「66年に法人化し、小田た。90年代以降は建築鉄骨の製作も手掛け、現在では鉄工として新たなスタートを切った。その後、搬送機、建築鉄骨関連部品、胴縁加工、立体駐車場、自動倉庫



本社工場と事務所



新規事業にも挑戦。トレーラーハウス製作で成長戦力を描く

品質と技術力の信頼高める “工場のショールーム化”推進

用鉄骨部材など幅広い製品を手掛けている。事業の内容は変わっても、地域の産業を支える製造業としての役割は変わっていない。社長自身の入社の経緯は。「子どもの頃から祖父に連れられて、現在でいう組合の集会など、さまざまな現場や取引先に顔を出していた。5人兄弟の長男ということもあり、自然と会社を継ぐ意識があった。鉄鋼短大(現産業技術短大)を卒業して鉄工所で経験を積んだ後、24歳の時に当社へ入社した。同期にはファブ業界で活躍している経営者層も少なくない。また、中小企業整備機構が運営する中小企業大学にも1年近く通った。外での経験があったからこそ、改めてものづくりの現場の面白さや難しさを実感した」

現在の工場や生産体制の特徴は。「当社のビジョンとして掲げているのが、工場のショールーム化。工場そのものをきれいに整備し、品質や技術力に対する安心感を持ってもらえる環境を作ること」を重視している。工場は単なる生産の場ではなく、お客さまや取引先に見てもらいたい場所でもある。設備や作業環境を整えることで、人・技術・設備の競争力を高めていきたい」



「今後の展望は。会社としては多能工化と新規事業の拡大を進めていく。そのために人材と設備への投資を続ける。品質、技術、人材のそれぞれでブランド力を高めていきたい。さまざまな課題や懸念を解決していきたいが、まずは足元をしっかりと固めていきたい」

「最後に今後の意気込みを。60周年は一つの節目だが、あくまで通過点。これまでの歴史を大切にしながら、次の世代につながる会社にしていきたい。昨年私自身が60歳という還暦の年を迎えたが、会社も今年で『還暦』。内容の濃い、『へビー』な一年にして